OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ランボーとジュール・ヴェルヌと『キャプテン・クックの航海記』 : 『酔いどれ船』のsources再考
Author(s)	高岡, 厚子
Citation	Gallia. 1992, 31, p. 201-208
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12660
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ランボーとジュール・ヴェルヌと『キャプテン・クックの航海記』

——『酔いどれ船』の sources 再考——

高　岡　厚　子

ピエール・カドーは1968年に出版された非常に興味深い研究書『キャプテン・クックの航跡／あるいはタヒチ人ランボー』[1]に於いて，ランボーの『酔いどれ船』と『キャプテン・クックの航海記』のイデーやイメージや語彙の類似性を細かく指摘し，『酔いどれ船』の sources をこの航海記の中に見出している。彼は，実際にまだ一度も海を見たことがなかったランボーが『酔いどれ船』の中にちりばめた専門的な航海用語や海の描写は，ランボーが子供のころ夢中で読みふけり，また何度も繰り返して読んだと伝えられている[2]『キャプテン・クックの航海記』から借用したものであると考えている。また，『酔いどれ船』の航跡はキャプテン・クックによってなされた探検旅行の航跡と重なり合うものであると説いている[3]。

拙稿 *Rimbaud et Jules Verne—— Au sujet des sources du Bateau Ivre*[4] に於いて，『酔いどれ船』の sources をジュール・ヴェルヌの小説『アトラス船長の冒険旅行』の中に見出し，『酔いどれ船』の航路はアトラス船長の極地探検旅行の航路と一致するものであるとの論を立てたことを思い起こしてみよう。ピエール・カドーの論考は一挙にわれわれの論考を覆す資料にもなると同時に，この論考を根拠づける資料にもなるようにも思われる。ここでいま一度，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通して見られるイメージが，『キャプテン・クックの航海記』のイメージとどのように関連しているかを見てみることにしたい。

1) Pierre Caddau, *Dans le sillage du Capitaine Cook ou Arthur Rimbaud le Tahitien*, Nizet, Paris, 1968.
2) Henri Mondor, *Arthur Rimbaud*, Revue de Paris, Février, 1957.
3) Pierre Caddau, *op. cit.*, pp. 23-24.
4) *Gallia XXX*, 大阪大学フランス語フランス文学会，pp. 53-60, 1991.

1 極地探検

先ず，われわれは『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通に見出されるイメージとして極地探検のイメージをとりあげた。『アトラス船長の冒険旅行』の第一部の副題は『北極のイギリス人』となっているが，この副題が明示するように，アトラス船長の目的は北極探検であった。それでは，キャプテン・クックの探検旅行の行程には，はたして極地探検が組み込まれていたのであろうか。航海記『南極及び世界一周旅行』[5]は「アヴァンチュール号」と「レゾリューション号」によって1772年，1773年，1774年，1775年になされた冒険旅行の記録であり，「レゾリューション号」の船長であったクックの手によるものである。表題が明示しているように，キャプテン・クックはこの時南極探検を試みていることがわかる。記録によると1773年1月17日に38度経線をたどって南緯67度30分に達し，1774年1月30日には109度経線上，南緯71度15分まで到達している[6]。また，『キャプテン・クックの第三次旅行あるいは太平洋旅行』[7]は1776年，1777年，1778年，1779年，1780年の航海記であるが，この航海では南極探検が再び試みられていると同時に，1778年8月11日にベーリング海峡を通過して北極圏に入り，1778年8月17日に北緯70度41分まで到達している[8]。このように未知の世界の探検者キャプテン・クックが北極，南極両極の極地探検をも試みていることから，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通の目的として考えた極地探検が，同時に『キャプテン・クックの航海記』にも共通する目的として考えられることが分かる。

2 自由の海

次に，われわれは『酔いどれ船』と『アトラス船長』に共通に見出されるイメージとして，極地に開けた自由の海のイメージをとりあげた。この海は氷河の中にありながら，凍結していない神秘な海であり，容易に航海のすすめられる無氷の海である。それはあらゆる種類の魚が泳ぎ，いく千もの鳥が飛び交い，不思議な光に照らされた海であった。『キャプテン・クックの航海記』にもこのような海が記されているだろうか。『キャプテン・クックの第三次旅行ある

5) *Voyage au Pôle Austral et autour du Monde, écrit par James Cook*, Traduit de l'anglais 1778. 6vol. in-8, cité par Pierre Caddau, *op. cit.*, p. 17.

6) Jules *Verne, Vingt mille lieues sous les mers*, Le Livre de Poche, 1980, p. 506.

7) *Troisième voyage de Cook, ou voyage à l'Océan Pacifique*, Traduit de l'Anglais par M. D., 1785, cité par Pierre Caddau, p. 18.

8) Jules Verne, *Les voyages du capitaine Cook*, La boite à documents, Paris, 1990, p. 267.

いは太平洋旅行』の1778年８月17日の日誌には自由の海に出くわしたことが記されている[9]。この海に見出されるあらゆる種類の魚が描写されている箇所として，ピエール・カノーは次のような例を挙げている。

> 海には魚がたくさんいた...ごくふつうの魚では灰色の鰯，幾種類ものブダイ，銀色の魚。 (Caddau, *op. cit.*, p. 54)

> 多くの魚が... われわれを完全に魅了した。この魚たちの黄色，青色，赤色，黒色ほどきれいな色をだれも想像することは出来ないし，いかなる芸術をもってしてもこれをまねることは出来ない。 (Caddau, *op. cit.*, p. 55)

また，無数の鳥の描写についても，ピエール・カドーは次のような引用をしている。

> ボートに乗っていた者たちは，島（ヨーク卿島）には人が住んでいた形跡は見られなかったと報告している。そこには幾千羽の海鳥がいた。(Caddau, *op. cit.*, p. 71)

> われわれは航海の途中で多くの木が繁った，砂地の島に上陸した。そこでおおくの不思議な鳥，とくに海鳥に出会った。 (Caddau, *op. cit.*, p. 72)

> 海岸は岩だらけであった。そしてあちこちに鳥がたくさんいた。(Caddau, *op. cit.*, p. 72)

『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通に見られた光輝く海が『キャプテン・クックの航海記』の中にも登場する。

> 夜の海は光輝いていた。とりわけ波の頂きや船跡の中に…大量のきよらかな光が海の表面を照らしていた。 (Caddau, *op. cit.*, p. 102)

> 夜，われわれはジグザグに航行した。８時と９時の間に海全体が突然明るくなった。水夫の言葉をかりれば海が燃えているようであった。
> これはいまだかつて想像も出来なかったような，まことに偉大な，珍しい眺めであった。水平線の広がりのなかで，大洋はまるで燃えているようにみえた。波の頂はそれぞれ燐光に似た光で照らされていた…(Caddau, *op. cit.*, p. 43)

---

9) Jules Verne, *Les voyages du capitaine Cook*, p. 268.

3 火　　山

最後に，われわれは『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通に見られるイメージとして火山のイメージをとりあげた。『キャプテン・クックの航海記』の中でも火山のことは度々語られている。ピエール・カドーの引用した例を見てみよう。

> バイロン岬から約十三海里のところ，羅針盤 O. N. －O. 1/4 N. の位置に，異常に隆起した円錐形の島がある。島の頂上は円錐形 (entonnoir) をしているが，この頂上から火が噴き出ているのが見える。しかし煙はみえない。これは確かに火山だ。私はこの島を火山島と呼ぼう。　(Caddau, *op. cit.*, p. 67)

> 7月1日，日没時，まだアマタソアをみることが出来るわれわれはいま E.1 / 4E.N. のところにいる。　(Caddau, *op. cit.*, p. 67)

> アマタソアとオガオの地面が高く隆起していることが注目される。アマタソアには，中央から煙の柱が出ていることから考えて見ると，火山があったと思われた……　(Caddau, *op. cit.*, p. 67)

> 夜に，トーソア（アマタソア）の別名の火山から火がでていることが，かなりはっきりと見えた。　(Caddau, *op. cit.*, p. 67)

> 以前にも書いたが，アマタソアの高さから考えると，それは相当大きな火山だと言える。そこからはいつも煙と火が出ているのが見えた。(Caddau, *op. cit.*, p. 68)

拙稿において，『アトラス船長の冒険旅行』では火山の発見が7月に行われたこと，『酔いどれ船』の詩句「燃える円錐形が開く群青の大空を，/ 7月が棍棒でなぐり倒していたときも (Quand les juillets faisaient crouler à coups de triques/Les cieux ultramarins aux ardents entonnoirs)」[10]が7月に火山を発見したことを歌っていることを述べ，2つの作品のイメージが7月における火山の発見という点で一致していることを示した。興味深いことに，上の引用から，キャプテン・クックが火山を発見したり，再発見したりするのも，7月であることが分かる。また，第1番目の引用を見てみるとキャプテン・クックは「円

10) Rimbaud, *Oeuvres*, noté par Suzanne Bernard, éd. Gramier, 1960, p. 130.

錐形 (entonnoir)」は火山の頂上の形のことだと述べている。われわれは，ランボーの「燃える円錐形 (ardents entonnoire)」は，火山から噴き出ている火柱のことを指していると解釈したが，ピエール・カドーはキャプテン・クックの旅行記に見られる「円錐形」という表現をランボーが借用したと考えて，火山の頂上の形と解釈している。いずれの解釈をとってもこの「燃える円錐形 (ardents entonnoires)」が火山のイメージと結び合わせて考えられていることは明らかである。

また，われわれは，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に見られる共通のイメージとして火山の近くで見られた「電気の作用 (électricité)」のイメージをとりあげたが，このイメージは『キャプテン・クックの航海記』においても見出される。

> 海水の燐光。最初の種類の光は，ほかの光とは全くちがった原因で作られているようだ。この問題に関してわたしの意見を言わせてもらうと，この光は電気の作用で生じていると思われる。 (Caddau, *op. cit.*, p. 65)

ここでは，電気の作用は火山とは関係ない場所で起こっているが，燐光によって光る海の水が，電気の作用で光るのではないかと考えられているわけである。

また，『酔いどれ船』では「歌うたう燐光の黄や青の目覚め (l'éveil jaune et bleu des phosphores chanteurs)」[11]の表現に，そして『アトラス船長』では「燐光を放つ空 (le fond phosphorescent du ciel)」[12]の表現に見られた「燐光」のイメージが，やはり『キャプテン・クックの航海記』にも見られる。ピエール・カドーは『酔いどれ船』の「燐光」と「電気しかけ」のイメージは『キャプテン・クックの航海記』から借用したものと解釈している[13]。

次いでわれわれは，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』では，火山の近くの「蛇 (serpent)」が登場していることを指摘したが[14]，この「蛇」のイメージは『キャプテン・クックの航海記』にも登場していることを，ピエール・カドーは次のような例を挙げて述べている。

> 爬虫類の中では，いろいろな種類の蛇がいた。有害な蛇もいたし，無害

---

11) Rimbaud, *op. cit.*, p. 129.

12) Jules Verne, *Aventures du capitaine Hatteras*, II, chap. XXI, *Magasin d'éducation et de récréation*, 1865.

13) Caddau, *op. cit.*, pp. 59-60.

14) *Gallia* XXX p. 48.

な蛇もいた。　(Caddau, *op. cit.*, p. 53)

ニュージーランドには巨大な蛇とトカゲがいることを，彼はわれわれに確信させた。丈も横幅も人間の体と同じ位の大きさのトカゲだったと，彼は述べている。　(Caddau, *op. cit.*, p. 53)

『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』では，北極の極地点の近くで出くわした「大渦巻き (Maelstrom)」のイメージが共通して登場していたことを，われわれは指摘した[15]。ピエール・カドーはこの「大渦巻き」については何も言及していない。

更にわれわれは，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に見られる共通のイメージとして極地の「不動性 (l'immobolité)」を挙げたが，これについてのピエール・カドーの指摘はない。おそらく『キャプテン・クックの航海記』の中にこのようなイメージがなかったのであろう。

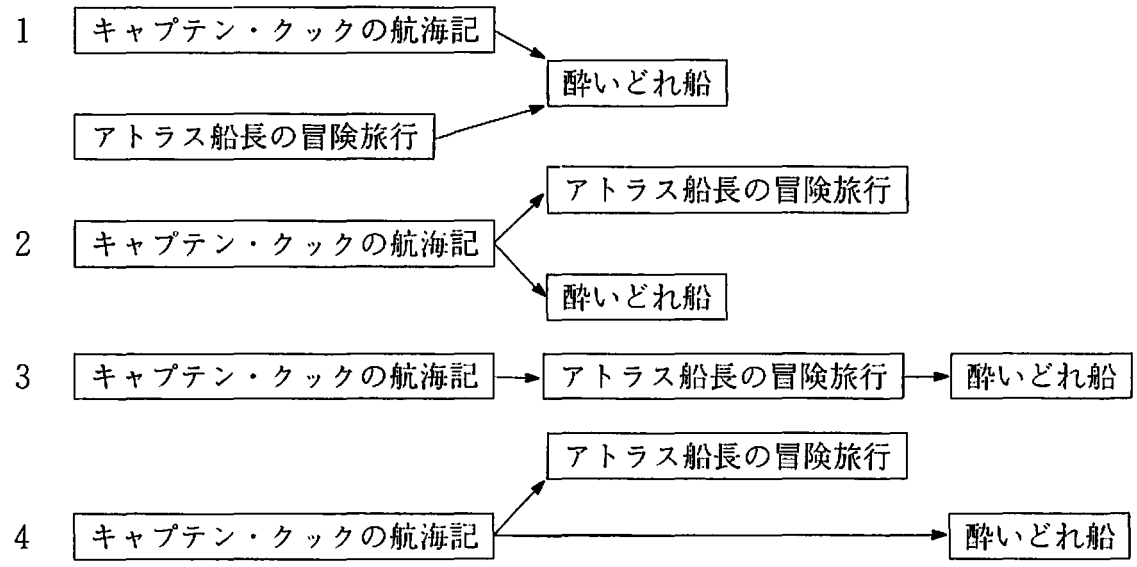
最後にわれわれは，『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に見られる共通のイメージとして，極地点に立てようとする「旗 (pavillon)」のイメージと未知の世界を探検し，未知の世界に「旗」を立てようとする人間の「傲慢さ (l'orgueil)」のイメージをとりあげた。ピエール・カドーは「旗」のイメージを『キャプテン・クックの航海記』の次の箇所に見出して『酔いどれ船』との共通点を説いているが，「傲慢さ」については触れていない。

それぞれの船は通り過ぎる時，3発大砲を打ち，彼が乗船するやいなやトップマストの頂にオランダの旗 (le pavillon hollandais) が掲げられた。もう一人の准将が21発大砲を打ってあいさつに答え，すぐさま大きな三角形の旗 (flamme) を掲げた。　(Caddau, *op. cit.*, p. 75)

以上，極地，自由の海，火山に関するイメージを追いながら，『酔いどれ船』と『アトラス船長』に共通に見られたイメージが，『キャプテン・クックの航海記』にも同じように登場していることを見てきた。3つの作品の中で同じイメージが同じように使われているということは，3つの作品が微妙にかかわりあっていることを物語っているのではないだろうか。そこで，3つの作品をめぐって次のような関係を考えてみよう。

---

15)　*Gallia* XXX p. 50.



先ず，第１の関係から見てみよう。『アトラス船長の冒険旅行』が『キャプテン・クックの航海記』と同じ日誌形式で書かれていること，『キャプテン・クックの航海記』が『アトラス船長の冒険旅行』と同じく，イギリス人の船長とイギリス人の乗組員による，極地探検の航海記でもあること，極地の描写に使われているイメージが同じであること，1879年にはジュール・ヴェルヌ自身『キャプテン・クックの航海記』を資料にしてキャプテン・クックの物語を書いていること[16]などを考えると，ジュール・ヴェルヌが『アトラス船長の冒険旅行』を書くに当たって『キャプテン・クックの航海記』を参考にしたことは，ほぼ確実と思われる。とすると，第１の関係，すなわち『酔いどれ船』は『キャプテン・クックの航海記』と『アトラス船長の冒険旅行』を参考にして書かれたが，『キャプテン・クックの航海記』と『アトラス船長の冒険旅行』の間には何の関係もなかったという考え方は成立しない。

次に第２の関係を見てみよう。『アトラス船長の冒険旅行』は『キャプテン・クックの航海記』を見て書かれたという設定は，すでに確実なものとなった。『酔いどれ船』が『キャプテン・クックの航海記』を見て書かれたと言う設定は，ピエール・カドーによって提案されている。しかし，極地の「不動性」，「大渦巻き」，「(探検者の) 傲慢さ」など『アトラス船長の冒険旅行』にあって『キャプテン・クックの航海記』にはないイメージが『酔いどれ船』に見られることから，『酔いどれ船』が『キャプテン・クックの航海記』のみを参考にして書かれ，『アトラス船長の冒険旅行』は関与していな

16) Présentation de Michel de Certeau pour *Les Voyages du capitaine Cook* de Jules Verne, pp. 7-8.

いという考えは成り立たない。従って第2の関係は考えられない。

第3の関係を考えてみよう。『キャプテン・クックの航海記』を参考にして書かれた『アトラス船長の冒険旅行』を拠り所にして,『酔いどれ船』が書かれたという設定である。ピエール・カドーは『酔いどれ船』と『キャプテン・クックの航海記』に共通に見られるイメージとして,われわれがとりあげた「極地探検」,「自由の海」,「火山」以外のイメージを数多くとりあげている。その中に『アトラス船長』には登場しないイメージがあることを考えると,『酔いどれ船』が『キャプテン・クックの航海記』を直接参考にして書かれていないという考えは成立しない。従って第3の関係もあり得ない。

最後の関係に入ろう。『酔いどれ船』は『キャプテン・クックの航海記』を参考にして書かれたと同時に,『キャプテン・クックの航海記』を参考にして書かれた『アトラス船長の冒険旅行』を拠り所として書かれたという設定である。『酔いどれ船』と『キャプテン・クックの航海記』に共通のイメージが見出されること,『酔いどれ船』と『アトラス船長の冒険旅行』に共通のイメージが見出されることから,この設定の可能性が最も高いと考えられる。『酔いどれ船』の sources はピエール・カドーが指摘しているように,ランボーが少年時代夢中で繰り返し読んだ『キャプテン・クックの航海記』であると考えられるが,同時に,われわれが指摘したように『アトラス船長の冒険旅行』でもあると考えられることをこの試論の結論としたい。

(D. 1975　梅花女子大学助教授)